



シェアハウスで暮らす —シェアの可能性

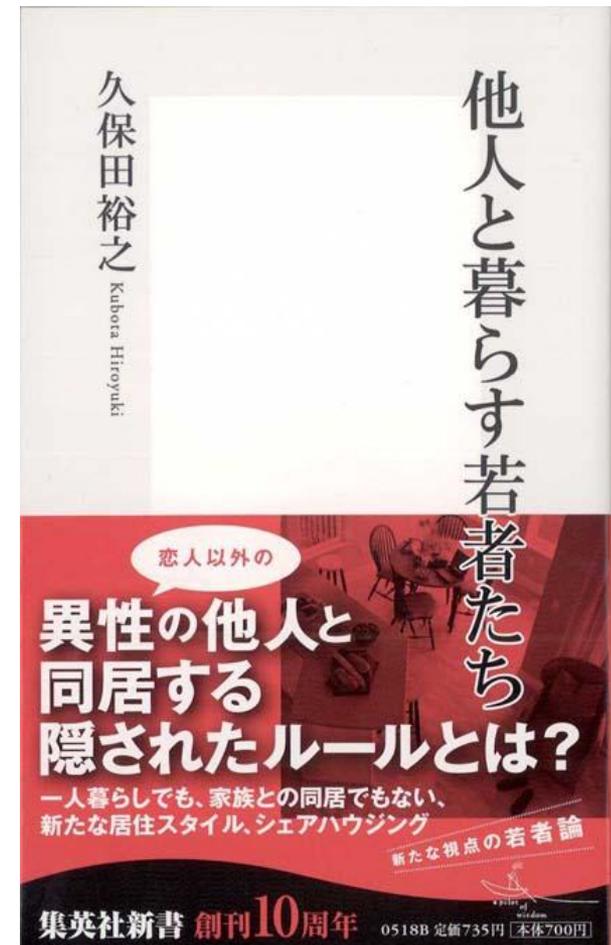
久保田 裕之 大阪大学大学院人間科学研究科助教
KUBOTA Hiroyuki

シェアハウスで暮らす

シェアの可能性

自己紹介

- 家族社会学者
- シェア歴10年(寮含む)
- 現在は、大阪で自主運営型のシェアで暮らす(男3:女1)
- 2003年から国内外の非家族的共同生活実践の調査を始める
- 2009年都内のルームシェア/シェアハウスのフィールドワークを基に新書を刊行



目次

- 1, 用語に関する若干の補足
- 2, シェアの何が新しいのか？
- 3, 家族の変化とシェアハウスの展開
- 4, シェアハウスは「新しい家族」か？
- 5, シェアハウスの可能性

1, 用語に関する若干の補足

- 1)シェアハウスの定義
「家族・恋人ではない他人と居住空間の一部を共用すること」(久保田2009)
- 統一的な用語法はまだない
 - 【最狭義】単身者向けに個室ベースで共有部分を充実させた、事業者介在型の賃貸マンション
 - 【狭義】典型的な家族同居以外の共同生活のうち、事業者が介在しているもの
 - 【広義】典型的な家族同居以外の共同生活全般
 - 【最広義】他者との共同生活すべて

1, 用語に関する若干の補足

- 2) 世帯=(共同居住)+(共同生計)
 - 【統計上の問題】生計の一部のみを共同しているにとどまるため、多くのシェアハウスは「複数の単独世帯」として把握されている点には注意(c.f.秋2002)
 - 「どの程度の生計を共同すれば世帯と呼べるか」の基準が不明確
 - 夫婦であればどれほど独立性が高くても一世帯？
 - 他人であればどれほど共同性が高くても別世帯？
 - 「リビングの共同」をもって「世帯」とするイギリスの国勢調査も(c.f.久保田2012)

1, 用語に関する若干の補足

- 3)「シェアが一般的」の二つの意味
 - A. 「シェアという住まい方が一般に広く認知されるようになった」
 - B. 「シェアという住まい方が一般に受け入れ可能な選択肢となった」
 - 周囲の反対、不安、偏見
 - ニュース、ドラマの素材、好奇の目
- 依然として、Aの途中であることに注意

1, 用語に関する若干の補足

- 4)「海外ではシェアが当たり前」の意味
 - A.「学生や働き始めなど収入が低く不安定なときに、仕事が軌道に乗って結婚するまでのあいだは、都市部の高い家賃を一人で払うよりも他人とシェアをするという次善の策があること」
 - B.「結婚や家族という旧来のつながりを超えて、自由と選択に基づく新たな共同性を模索していること」
- 欧米でも結婚すればシェアを「卒業」するのが一般的
 - シェアハウスはすぐれてアングロサクソン(旧イギリス植民地圏)の文化であり、家族主義の強いフランスやスペインでは低調という指摘も(cf.Heath and Cleaver 2003)

- フランス映画
「みんなで一緒に暮らしたら」
- J・チャップリン「嫌よ、共同生活なんて。ヒッピーじゃあるまいし」
- <http://www.cetera.co.jp/minna/>

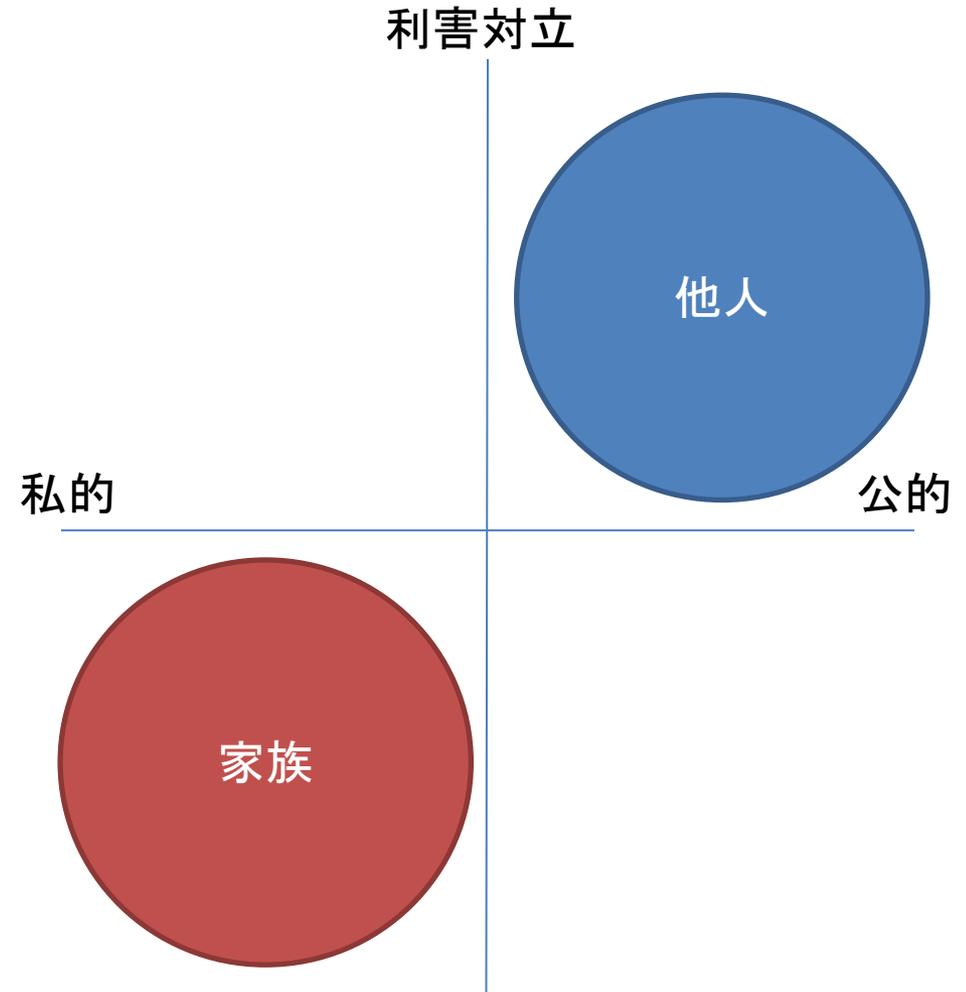


2, シェアの何が新しいのか？

- △「孤立から絆へ」？
 - 非婚化・晩婚化傾向は強まっている
 - 結婚願望は依然として強いまま
- ×「私有から共有へ」？
 - 公的にも様々な制度・設備を共有
 - 会社でも制度的な形で多くを共有
 - 家族と沢山のものを共有→むしろ個別化／個人化
- ×「利己から利他へ」？
- ○家族・恋人といった関係だけに想定されてきた居住を含む私的な共同／協働が、家族・恋人以外の他人に開かれつつあること

2, シェアの何が新しいのか？

- 私的な生活の共同であること
≠公的な政治・市場・地域社会
- 利害の異なる他人との共同であること
≠家族・恋人
- ※どのような変化か？



2, シェアの何が新しいのか？

- なぜ今シェアなのか？
 - 1) 非婚化・晩婚化と単身期間の延長
 - 2) 景気の後退と「住宅は家族持ち」の限界
 - 3) 他人との生活イメージの転換
- ※シェアは定義上も現象の上でも、家族制度と密接な関係にある

3, 家族の変化とシェアハウスの展開

- シェアが安く、安全で、楽しいものだとしたら（三浦2012）、なぜこれまでは少なかったのか？
- なぜ結婚しても、一生他人と暮らす人は増えないのか？
- なぜ日本では「次善の策」としてさえシェアが普及してこなかったか？

3, 家族の変化とシェアハウスの展開

- シェアへの疑問から考える(久保田2009)
 - 1)「他人と住んで危険じゃないの？」
 - 家族は安全／他人は危険という想定
 - 2)「赤の他人と住んで面倒じゃないの？」
 - 家族は気楽／他人は面倒という想定
 - 3)「一人暮らしも出来るのに、そんなに高い家賃を払ってどうしてわざわざシェアするの？」
 - 他人というならより一人がましという想定

3, 家族の変化とシェアハウスの展開

- 家族と非家族の峻別
 - 1) 家族(恋人) = 安全 / 安心 / 気楽
 - 血縁?
 - 愛情?
 - 2) 他人 = 危険 / 気遣い / 面倒
 - 利害?
 - 相性?
- ※「家族と住むか / 一人で住むか」という一見対極に見える住まい方は、「一緒に住めるのは家族だけ」「そこまで助け合えるのは夫婦だけ」という規範の両面

4, シェアハウスは「新しい家族」か？

- 1) 関係・絆・つながりへの指向性
- 2) 自由・自律・プライバシーへの指向性
 - 「みんなでひとり暮らし」(西川2012)
- シェア＝関係調整のためのインターフェイス
 - 選び、調整し、どうしても嫌なら逃げ出せる
 - 「甘えない。けど、寂しくない」(久保田2009)

5, シェアハウスの可能性

- 家族の理想の陰で見過ごされてきた、利害の異なる他人との共同が見直され・広がることで、多様な協働のあり方や、協働を支える仕組みの発展が期待 (cf.阿部・茂原2012も参照)
- 100%の安全や信頼を求めて裏切られ失望して一人の殻に閉じこもるのではなく、20%の信頼、10%の利害の一致をつなぎ合わせて多様性の中で生きていく技術・制度に光を当てる
- 民主的価値：一人では決してできないことを、他人と助け合って可能にする訓練の場

5, シェアハウスの可能性

- 世界の様々な共同生活の試みに学ぶ
 - スウェーデンのコレクティブハウジング
 - オランダのセントラル・ヴォーネン
 - イギリスのロジャー
 - アメリカのコウ・ハウジング
 - スペイン・フランスのホームシェアリング(調査中)
- 高齢者問題、若年貧困問題、ひとり親問題へ





参考文献

- 阿部珠恵・茂原奈央美, 2012, 『シェアハウス——私たちが他人と住む理由』辰巳出版.
- 秋裕樹 (=akky), 2002, 『ルームシェアする生活』二見書房.
- Heath, S., E Cleaver. , 2003, Young, Free and Single?: Twenty-somethings and Household Change, Palgrave Macmillan.
- 久保田裕之, 2009, 『他人と暮らす若者たち』集英社新書.
- 久保田裕之, 2012, 「世帯概念の再編——非家族世帯と『家計の共同』をめぐって」『年報人間科学』33:27-42.
- 三浦展, 2012, 『第四の消費——つながりを生み出す社会へ』朝日新書.
- 西川敦子, 2012, 『大人のためのシェアハウス案内』ダイヤモンド社.